



医学部だより

第25号

2012.10.1



めげない精神力

医学部長 玉置俊晃

医学教育改革や医師養成制度改革が求められて、多くの改革が行われ10年以上の月日が過ぎた。そろそろ、医学教育改革や医師養成制度改革の成果と評価を行う時期に来ているのではないかと最近感じている。医師養成制度改革、特に初期臨床研修制度については多くの問題点が指摘されている。初期臨床研修制度が、若い医師の育成に対して本当に良い制度であるのか否か？評価を行う必要がある。また、医局制度を悪者扱いしその役割を軽視して、地域医療に対する地方大学医学部の人材派遣システムを崩壊させた。このために深刻な地域医療崩壊を引き起こした。この点は、他の場所で論ずるとして、今回は医学教育改革の成果と評価を述べてみたい。

21世紀医学・医療懇談会報告を受けて、平成13年3月27日に「21世紀における医学・歯学教育の改善方策について」が出され、医学教育モデル・コア・カリキュラムが発表された。この中で、医の原則として、1) 医の倫理と生命倫理、2) 患者の権利、3) 医師の義務と裁量権、4) インフォームド・コンセントをコアとして教えることになった。私は医学部を卒業して医師になって36年目になるが、私が医学生であった頃は、生命倫理教育や患者の権利を教える教育やコミュニケーション教育は、科目としては全く無かったと思う。今回の医学教育改革がもたらした大きな成果の1つは、医学部の教員と医学部生に医療を実践するに当たり患者中心の視点を強く植え付けたことであると思う。これは非常に大きな成果であると私は感じている。

一方、気になる点もある。平成22年度改訂版の医学教育モデル・コア・カリキュラムには、「医師として求められる基本的な資質」との項目がある。資質としては、1) 医師としての職責、2) 患者中心の視点、3) コミュニケーション能力、4) チーム医療、5) 総合的診察能力、6) 地域医療、7) 医学研究への志向、8) 自己研鑽、の8項目が挙げられている。私としては、9番目に「めげない精神力」を追加したいと考え

ている。医学教育改革への認識が高まり、これまでの医学教育の在り方に多くの反省がなされて改革が進められた。非常に丁寧で解りやすい講義や実習が計画されて良い面もあるが、一方、あまりにも手を取り足を取り丁寧な解りやすい教育方法を取り入れたために、難解な生命科学に対する挑戦や厳しい医療や新しい医療に挑戦する時に不可欠な「めげない精神力」が涵養されていないのではないかと感じることである。医学の研究や医療の現場では、自分の思い通りにならないことは非常に多くある。夜も土日も費やして、実験しても自分が思い描くような成果が得られずに立ち尽くすことがある。色々の最新の方法論を駆使しても、生体内で起こっている病態を説明できないこともある。休日も返上して一所懸命に治療しているにも関わらず、患者さんの病態が改善せずに悪化することもある。結果が悪くなると、患者さんやその家族に不信感が生まれたり、批判的な言葉を浴びせられたりして、非常に辛い思いをしたり落ち込むことを、私も経験している。医学・医療の世界では、予想通りに行かないことは非常に多くある。このような時に行き詰まりを打開するために一番必要なのは、「めげない精神力」ではないだろうか？

少子化で最近の子供は、周辺の大人が大変丁寧に手間暇をかけて育てているように思う。大人が敷いたレールの上を走って行けば良い結果が約束されているかのように、子供たちは錯覚しているようにも思われる。また、医学教育改革で医学部の教育は、非常に丁寧で解りやすい講義や実習が用意されている。しかし、医学や医療の世界では、必ず良い結果が約束されているレールは少ない。時には、難解で一見意味不明の講義や実習が用意されていても良いのではないかと思う。学生が難解な講義に直面して大いに悩むことも必要ではないか？教員に怒られて落ち込む経験も必要ではないか？愛情に裏打ちされた叱責は、学生の心に響き精神力を鍛えると思う。「めげない精神力」を涵養することは簡単ではなく多くの困難があるが、医療人を育成するには「めげない精神力」を育む必要があるのではないかと最近強く感じている。

目次

CONTENTS

巻頭言	1	徳島医学会報告	10
特集「古川宇宙飛行士帰国報告会」	2	受賞者紹介	10
国際交流	3	OSCE 成績優秀者紹介	11
オープンキャンパス報告	6	医科学生総合体育大会入賞者	11
外から見る医学部	7	白衣授与・Student Doctor 認定証授与式	11
学遊抄	7	新任教職員あいさつ	12
学生委員会情報	8	新任准教授紹介	12
教務委員会情報	8	医学部行事予定	12
数字で見る医学部	9	編集後記	12

古川宇宙飛行士帰国報告会を徳島で開催して

生体栄養学分野 二 川 健

私は歴史が大好きです。多くの歴史小説を読むうちに、なぜ坂本龍馬は徳島でなく土佐で生まれ育ったのか？なぜ夏目漱石は徳島でなく松山に赴任したのか？などといったたわいのないことを考えるようになりました。NHKが大河ドラマで取り扱ってほしい歴史上の人物のアンケートを行ったのですが、残念ながら徳島（阿波）に関係する人物が主人公として扱われる可能性はほとんど無いようです。なぜ徳島からは歴史上の大人物がでないのでしょうか？それは、環境（風土、地理）の影響ではないかと思っています。かの吉田松陰も「**地を離れて人なく、人を離れて事なし、故に人事を論ぜんと欲せば、先ず地理を觀よ**」と述べているように、人物の成長に最も影響する因子は、環境（風土、地理）です。徳島の風土は（南海地震の可能性が大きいと言われておりますが）温暖で大きな震災に遭ったことも少なく、また自殺率が全国一低いように、とても住みやすい環境です。それが逆に保守的な風土（変革を嫌う環境）や実利を生まないものにお金を投資しない風土を生んでいるように思えてなりません。具体的に挙げますと、プロ野球の公式戦ができない野球場、ドイツと深く交流しながらドイツの使節団からこんなところでうちの代表に練習をさせるわけにはいかないと評されたサッカー場、全国的に有名な少年少女合唱団を有しながら未だできない音楽専用ホールなどなど、徳島県が文化（お金にならないが、その土地の環境を代表するもの）に投資しない事例はたくさんあります。年齢を重ねこのような現状を知ると、徳島県出身の自分としては非常に悲しい思いがした次第です。そのような環境を少しでも打破できないだろうか、身の程も知らずに考えたのが今回の古川宇宙飛行士の招聘でした。自分たちでできなかったことは次の世代（若者）に託すしかないと考えたのです。2002年第4回国際宇宙ステーション宇宙実験国際公募に採択され、JAXA（宇宙航空研究開発機構）とNASA（アメリカ宇宙航空局）との交流の中で、古川宇宙飛行士をはじめとするJAXA、NASAの多くの一流の人物と知り合うことができました。宇宙飛行士の発する言葉に大きな感銘を受け、自分自身の研究のモチベーションを高めることができました。ただし、私自身は高所恐怖症、閉所恐怖症や肥満など宇宙飛行士になるには大きな障害となる欠点を多数有しておりますので、宇宙飛行士になるという夢は捨て、宇宙に最も近い場所「ケネディスペースセンター」に科学者として行くと

いう目標を立てました。そして、2年前の2010年に実際に私自身の宇宙実験 MyoLab を実施することができたときの感動は私の一生の宝物です。このような宇宙飛行士から受けた感動や情熱を徳島の若人に伝えることができれば、きっと徳島の未来を開いてくれる人材が出てくるのではないかと考えたのです。

ただ、自分が考えただけで宇宙飛行士が徳島に来てくれるほど、宇宙飛行士は暇ではありませんでした。向井宇宙飛行士には2度、毛利宇宙飛行士には5回ほど招聘の依頼を行ったのですが、残念ながら多忙のためうまくスケジュールが調整できませんでした。そういうとき、JAXA 広報の松尾尚子さんと出会ったのです。2010年4月5日に私自身の宇宙実験 MyoLab が実施されたので、JAXA 主催で MyoLab 報告会を開催するとその宣伝も兼ねてプロモーションビデオを作製するために撮影担当の方と一緒に徳島に来られました。折角の機会でしたので、夕食がてら秋田町にでかけ、松尾さんに上記の事柄を、つまり徳島に宇宙飛行士を呼びたいということを懇々と説明しました。途中カラオケも入ったのですが（笑）。それが、2011年3月9日から10日未明にかけてです。3月10日は二日酔いで何の仕事もできず、一夜明けさあ仕事という時に起こったのです。あの東日本大震災が！！当然、報告会は中止となり、つくばの宇宙センターも相当被害が出たらしく、松尾さんとも音信不通となってしまいました。宇宙飛行士の招聘どころではなくなったなあというのが実情でした。半年ほどが過ぎ、2011年10月に宇宙実験全体の報告会が実施され、その時に松尾さんと再会し、「宇宙飛行士の徳島への派遣の件、覚えていますよ。ちょうど古川宇宙飛行士が宇宙から帰ってきます。古川宇宙飛行士は医師だから、宇宙医学の研究者が多い徳島大学が良いと思っています。」と告げられたときは、天にも登る気分でした。

こうして実現した古川宇宙飛行士の徳島での帰国報告会ですが、自分で言うのも何なのですが、大成功でした。その要因は、まず古川宇宙飛行士のお人柄でしょう。どんな些細な質問にも丁寧に答弁される姿勢には、若いだけでなく我々大学人も大きな感銘を受けました。宇宙実験や宇宙での生活をビデオなどを使い、わかりやすく説明していただきました。古川宇宙飛行士のファンということで神奈川県からも出席して下さった方も数名おられました。私も、古川宇宙飛行士とはほぼ同世代です（私もウルトラセブンのファンです）ので、共感するところは非常に大きかったです。古川宇宙飛行士が再度宇宙に行かれた時にはもう一度徳島に来て欲しいと強く希望しております。次に、参加者、特に小学生の参加者が、非常に多かったのがよかった



です。その質問内容も古川宇宙飛行士もたじたとするようなものや、我々もびっくりするようなものが沢山ありました。徳島の将来は決して暗くないと思った次第です。この講演会の成果がでるのは10年以上の時間がかかるでしょうが、講演会終了後4ヶ月程でひとつ成果が私の耳に入りました。それは、鳴門教育大学附属中学校の今秋の修学旅行がJAXAのつくば宇宙センターになったそうです。徳島の若人が大きな夢を抱いてくれることを期待しております。

最後になりましたが、古川宇宙飛行士の講演会に対しご支援を頂いた、徳島新聞社、徳島県教育委員会、徳島県医師会、NHK 徳島放送局、四国放送株式会社、大塚製薬株式会社の方々にはこの場を借りて篤く御礼申し上げます。また、裏方で進行をサポートして頂いたJAXA 広報部の皆様、徳島大学医学部総務課の皆様、

徳島大学医学部 栄養学科の皆様にも感謝申し上げます。



写真は、古川宇宙飛行士が長期宇宙滞在記念の額を玉置医学部長に手渡しているところです。



国際交流

慶北大学校 交換留学生

報告

栄養学科4年 安井 朗 洋

2011年3月から2012年2月までのほぼ一年間、大韓民国はテグ、慶北大学校にて交換留学生として過ごしました。

初の海外長期滞在、知り合いゼロ、英語は片言、韓国語なんて全く知らない、という状況からのスタートでした。初めは非常に大変でしたが、生活すればするほど毎日が楽しくなっていったのを覚えています。

授業は好きなものを好きなだけ。韓国語、文化人類学に観光地理学、英語でのプレゼンなどなど、専門に関係なく取りました。自由な時間も多く、友達とスタディグループを作ったり、バックパックの旅に出たり、韓国小学生相手にボランティアをしたりetc...色んなことをしました。本当に色々



とありすぎて、とても書ききれません。

僕は留学中に専門性を高めたわけではありません。専門職を志す学生が多い医歯薬では、珍しい時間の過ごし方だっただけだと思います。なぜ留学したのか、どうして韓国だったのか。正直、特にはっきりとした理由はありませんでした。新しい世界を見たい、知りたい、感じたい。そんな純粋で曖昧な思いが自分を留学に向かわせた、といったところでしょうか。

留学には、想像を超えた学びがありました。たくさんのユニークな人に出会い、その出会いを通じて、自分のアイデアの幅が格段に広がったと感じます。韓国で過ごした一年間は、これからの人生の「きっかけ」に満ち溢れたGap Yearの縮図であり、自分にとってテグとは、一つ海を越えた向こうにある、第二の故郷だと思っています。

ソウル国立大学校医学大学 サマー・リサーチ・プログラム

報告

医学科3年 森本 佳奈

私は8月6日より3週間、ソウル国立大学校医学大学のサマーリサーチプログラムに参加させて頂きました。

神経科の chief professor である Dr. Seok のご配慮により、神経変性疾患に関する研究室で実験をさせていただきました。1日のスケジュールとしては、朝一番の神経科の morning conference に出席し、午後から研究室に通いました。夜は研究室のインターンの方やポストドクの方と食事をして、残りの実験を終えて大体夜の8時ぐらいにアパートに帰宅していましたが、実験が長引くと23時までかかることもありました。

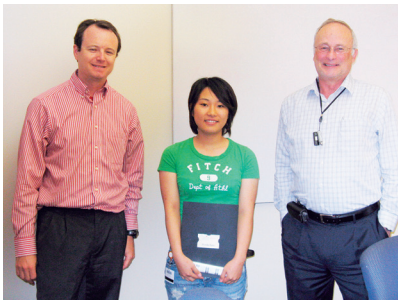
研究室の方とのコミュニケーションは基本的に英語で行いましたが、お互いに英語が第一言語ではないため説明に苦勞することもありました。しかし逆に言えばいろいろな国の人とコ

ミュニケーションを取ることができる英語の素晴らしさを実感しました。

最後に今回の留学にあたりお世話になりました玉置医学部長、福井清教授、勢井教授、村澤医学部長補佐をはじめ諸先生方に厚く御礼申し上げます。



テキサス大学 サマー・リサーチ・プログラム

報告
医学科4年 狩野 静香


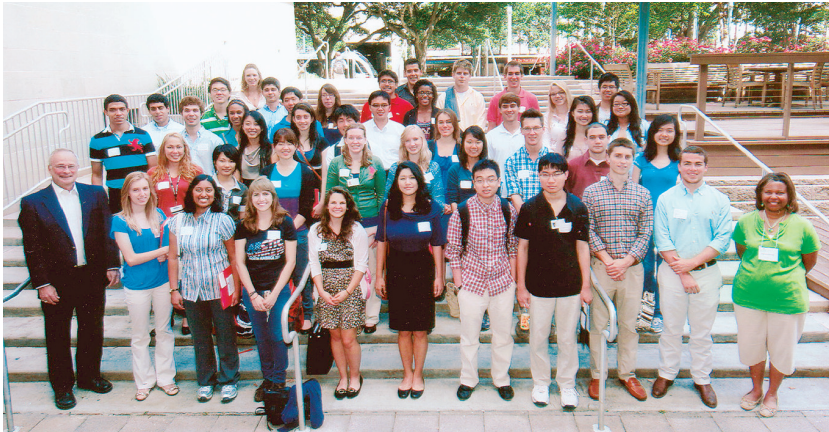
私は今回、テキサス大学ヒューストンヘルスサイエンスセンターでのサマーリサーチプログラムに参加させて頂きました。このプログラムでは将来医師を目指す大学生や海外の医学生を対象として自分の興味のある分野のラボで約8週間、研究を行なうことができます。私はDr. Beauchampのラボに配属され、脳の認知機能をfMRIを用いて解析する研究を行ってきました。Dr. Beauchampはいつも笑顔でやさしい人でしたが、研究への姿勢はとても厳格で、ラボミーティングやジャーナルクラブでは常に熱いディスカッションをメンバーと交わしている姿が非常に刺激的でした。メンバーはアメリカだけでなくドイツ、インドと多国籍のチームで成り立っており、国際色の高い雰囲気でした。みんなフレンドリーでランチに一緒に行ったり、ホームパー

ティーに誘ってもらったりと、研究以外の面でも充実した時間を持つことができました。また、MDアンダーソンがんセンターで研究をされている日本人の方にセンター内のラボを見学させていただくという非常に貴重な経験もできました。私にとって初めての海外経験ということもあり当初は不安もありましたが、今はそれ以上に非常に充実した8週間のなかで多くのことを経験できたことの喜びでいっぱいです。これからもより多くの学生にこのような体験をしてもらいたいと願います。

最後になりましたが、今回このような貴重な機会を与えてくださった玉置医学部長をはじめ、多くの諸先生方に厚く御礼申し上げます。


医学科4年 濱口 桃香

5月末から2ヶ月間、テキサス大学ヒューストンヘルスサイエンスセンターのサマー・リサーチ・プログラムに参加させて



いただきました。私は腫瘍内科学分野で前立腺がんの臨床研究や病院での外来の見学を行いました。2ヶ月という短い間ではありましたが、自分のやりたかったがんの研究とアメリカでの病院見学の両方を実現でき、非常に充実しておりました。

今回の留学は私に強烈な刺激を与え、医学や語学のみならずその他様々なことを学び、非常に有意義であったと強く実感しています。また日本にいる時とは全く異なる環境で2ヶ月間を過ごすということは、自分を見つめ直し将来について考える良い機会となりました。医学生という立場、そして4年生というまだ若い時期にこのような貴重な経験ができたことを本当に嬉しく思います。

最後になりましたが留学するにあたりお世話になりました。玉置俊晃医学部長、福井清教授、村澤普恵医学部長補佐をはじめ諸先生方にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

ハノーバー医科大学 交換留学プログラム

報告
医学科4年 神田 瑞希

私はハノーバー医科大学 (MHH) で8週間、病理学のプロテオミクスのラボに参加させていただきました。この留学はMHHとの交換留学で、臨床実習・研究活動etc 興味のあることを交渉次第で自分で選ぶことが出来るお得なプログラムになっています。私は研究に興味があるので、論文の内容や体験出来る手技などを考えてラボを選びました。研究テーマは「骨髄の組織間液内プロテオームの同定」となりましたが、とても自由な雰囲気(裁量的な面)で取り組ませて頂き感謝の気持ちでいっぱいです。日本での研究内容の発表や通常のセミナーでの進捗状況の発表など英語で発表する機会もたくさん作って頂いたこ



とも、とても勉強になりました。放課後はラボの友達やMHHの学生、寮の仲間と楽しく過ごし、週末はドイツ国内・国外へ旅行に出掛け(ハノーバーは旅行にとっても便利な立地です)研

究以外でも大変充実した時間を過ごすことが出来ました。このような素晴らしい機会を与えて下さった諸先生方、お世話になりました関係者の皆様、本当にありがとうございました。

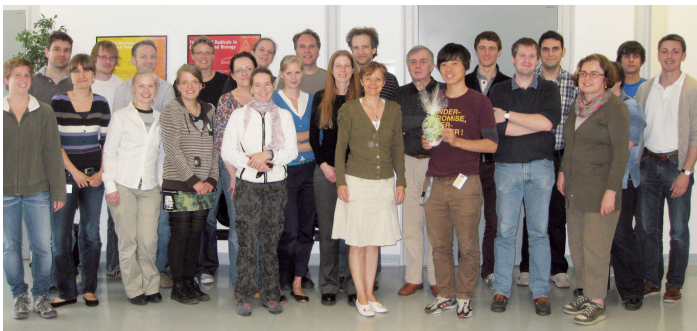
栄養学科4年 安井朗洋

6月から1カ月半ほど、ドイツのニーダーザクセン州にあるハノーバー医科大学にて交換留学生として過ごしてきました。糖尿病の研究を行っている生化学の教室で、ES細胞の分化能に関する研究、脂肪酸の膵β細胞に対する毒性の解析、と2つのテーマに携わらせていただきました。

ドイツの研究室は、日本のそれとは様々な点において異なっていました。技術員の助けの下に合理的・効率的に行われる実験、音楽のかかった楽しい雰囲気の実験室、夕方5時には人のいなくなる研究室。ドイツの研究者達は日本と比べ、公私をはっきりと区別し、生活を楽しんでいく中、その生活の一部の仕事として研究をしているように思えました。

ヨーロッパを体いっぱいを感じながら、全く新しいテーマの研究を、ドイツという文化的にも物理的にもはるか彼方に

ある国で行ったこの経験は、これから研究者として生きてく上で、かけがえのないものになると思います。最後に、今回の留学にあたり大変お世話になりました、玉置俊晃医学部長、中屋豊教授、村澤普惠医学部長補佐をはじめ諸先生方に厚く御礼申し上げます。



ヘルシンキメトロポリア応用科学大学 留学生受け入れ秋季プログラム 報告

保健学科2年 中野宏美

私は今、フィンランドにて看護の勉強をしています。今回8月17日から9月26日までの約40日間、ヘルシンキメトロポ



リア応用科学大学で勉強する機会を頂きました。

私は留学生コースに所属しており、基本的な看護技術や解剖学を学んでいます。徳島大学で学習した内容も含まれていますが、違う観点から述べられている部分もあり大変参考になっています。留学生コースはアフリカやヨーロッパなど様々な国や地域から留学生が来ており、そのような中で一緒に勉強するのは貴重な体験だと思います。拙い私の英語でもしっかり耳を傾けてくれる人たちに感動する毎日です。住んでいるアパートはヘルシンキ市内にあり、休日は観光地を巡るなど充実した日々を送っています。

最後に、この留学に関して今現在もサポートをしてくださっている、徳島大学、ヘルシンキメトロポリア応用科学大学双方の先生方、コーディネーターの方、教務の方に厚く御礼申し上げます。最後まで悔いのないように留学生活を楽しみたいと思います。

保健学科2年 湯浅彩夏

ただいま私はフィンランドのヘルシンキメトロポリア応用科学大学に交換留学生として通っています。留学期間も折り返し地点に差し掛かっています。この20日間、本当に充実した毎日を送っています。

大学での授業は、学年の垣根を越えて講義を受けさせてもらっています。こちらの講義は、自分の考えや意見を学生自らが主張しながら進められていきます。クラスメイトたちは、色々な国からやってきた学生たちが集まっているため、その国ごとの考え方を聞くことができ、日本との違いが知れるので実に興味深いです。どの学生も主体的に学んでいる感じが感じられて、毎日クラスメイト達に刺激されています。

講義がないときにはフィンランド各地を観光しています。自然あふれる街並みを歩くのは、とても気分が良いです。また、



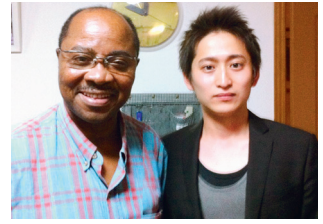
行く先々で出会う方々との交流も楽しみの1つです。

こちらでの生活も残り半分。フィンランドの人々の温かさによって支えられながら、悔いのないように全力で駆け抜けます！

「海外短期留学合同報告会」を11月に開催する予定です。
日時と場所は、決定しだい掲示板またはHPでお知らせしますので、ふるってご参加下さい。

「USMLE Step 1」に合格して —世界で活躍する医者になるために—

医学科 6年
中西 信人



日本人がアメリカで医者になれる。1年の時、その言葉を聞いて私は自分の将来にイチローや松井を想像した。それから4年、私はUSMLE Step1を受験し、合格した。USMLEとはアメリカの医師免許取得のために必要な資格であり、世界中の医学部の学生に受験資格がある。3つあるStepのうち、Step1は最も難関だと言われている。いつか世界の舞台へという思いから、4年前私はカルビ先生の教室の扉を叩いた。その日から毎週カルビ先生との勉強会が始まった。アメリカの試験は日本の国家

試験やCBTよりはるかに問題が難しく、しかも当然全て英語だ。あまりの労力と難易度に何度も挫折したが、4年間嫌な顔一つせず支えてくれたカルビ先生のおかげで最後まで走りきることができた。まだまだ、イチローや松井とは程遠いが新たなStepに進む事ができた。このまま駆け上がりたい。日本を越えて世界で通用する医者になれるように。どこまでも高く。

オープン

Open Campas

キャンパス

医学科

8月10日、大塚講堂において医学科オープンキャンパスが開催されました。本年度は、大塚講堂が使用できないために、座席数の少ない長井記念ホールでの開催となり、このため午前と午後の2回に分けての実施になりました。昨年同様の猛暑にも拘わらず、午前・午後を通じて高校生だけでも339名と多数の参加がありました。当日は、玉置医学部長の挨拶の後、医学科の紹介、臨床・基礎のミニ講義が行われ、その後、いくつかの班に分かれて、医学科、疾患プロテオゲノム研究センター、疾患酵素学研究センターでご協力頂いた各研究室、総合研究支援センター、スキルスラボ（医療教育開発センター）等の施設見学が行われました。臨床医学のミニ講義では、神経内科の梶教授により「ウィリアム・オスラーと臨床医学」と題して、臨床医はどのようにあるべきかについて詳しく解説が行われ、また基礎医学のミニ講義では、法医学の西村教授により「裁判医学としての法医学、予防医学としての法医学」と題し

て、死因を解明する法医学の医学・医療における重要性について解説が行われ、参加者は非常に熱心に講義に耳を傾けていました。以前より参加者から聞かれる「医学科の現役学生に直接いろいろ聞いてみたい」という声にはまだ応えられておらず、今後の課題を残していますが、全体を通じて参加者には本学医学科の「世界に通用する医学者・医師を育てていく」ための様々な取り組みを理解してもらえと共に、その魅力が伝えられたように見受けられました。（井本逸勢）



栄養学科

8月9日午前に栄養学科のオープンキャンパスを開催いたしました。長井記念ホールにて、学科長の挨拶があり、その後、入試委員の中屋から大学の紹介、平成25年度入学者選抜の概要、入学者状況、栄養学科卒業生の就職状況を説明しました。ミニ講義として瀬川准教授に「女性研究者からのメッセージ」と二川教授「宇宙栄養学」と題する講演が行われました。その後、研究棟の見学を行いました。研究棟では、各部屋に案内係を付け、受験生に説明したり、受験生からの質問を受けていました。同時に2つの教室の学部学生の卒業研究の中間

発表会を開き、どのような研究をしているかを紹介しました。

当日は、徳島県を中心に北海道から九州まで、約200名の受験生、保護者および教員が参加いただきました。ミニ講義では、初めての女性の講演者である瀬川先生に、女性研究者として活躍できること、研究のおもしろさをお話頂き、また二川先生には筋萎縮の研究と今後の栄養学科の方向性を示していただきました。学生からは栄養に興味をもった、あるいは栄養学の深さがわかったなどの意見がありました。また、研究施設の充実ぶりにも関心があったようです。「考えていた以上にすごいいところでした」というようなコメントもありました。（中屋 豊）

保健学科

今年のオープンキャンパスは、大塚講堂が改修中で使用できないために、8月8日（水曜日）の午前と午後の2回に分けて長井記念ホールを使用して実施しました。午前の部は、看護学専攻の受験生を対象に、また午後の部は、看護学専攻、放射線技術科学専攻、検査技術科学専攻の3専攻の受験生を対象に実施しました。今年は、午前の部が314名、午後の部は403名、合計717名（学生525名、保護者192名）のインターネットによる申し込みがありました。保健学科では、毎年参加希望者が増えており、県外からも多くの受験生に参加して頂きました。



長井記念ホールでは、はじめに学科長の挨拶があり、入試委員長の入学試験の概要説明、各専攻主任による

各専攻の紹介の後、保健学科棟に移動して施設見学と専攻別相談会が行われました。施設見学では、少人数に分かれて各実験設備などを見学して頂きました。放射線技術科学専攻では、今年は、2年生や3年生の在学生にも参加してもらい、参加者の誘導や、実習設備の説明を行ったのですが、これが大変好評でした。アンケートでは、「実習設備を説明する学生が大変生き生きとしていて印象的でした。」というコメントがありました。また、「多くの実習設備を見学することができてよかった。」という声も聞かれました。専攻別相談会では、各専攻が工夫をして特色や概要を説明しており、参加者は熱心に耳を傾けていました。今、日本の大学では、少子化のため大幅に受験者数が減少しており、各大学では、オープンキャンパスに力を入れて大学のPRを行っています。本学科では、オープンキャンパスに参加する受験生が増えており、この傾向が今後も続くように、さらに工夫をして参加する受験生にとって魅力のあるオープンキャンパスにしていきたいと思ひます。（近藤 正）

外から見る医学部



研究のすすめ

徳島大学名誉教授
齋藤 史郎

徳島大学蔵本キャンパスには、医学部に3学科7コースがあり、これに歯学部、薬学部、徳島大学病院、疾患酵素学研究中心、及び疾患プロテオゲノム研究中心が加わり、一大生命科学センターを形成している。各学部ではそれぞれの専門職を、大学院では研究者を育成しているが、専門職にも研究者にも共通して求められるのは研究心であり、研究成果である。

大学で学ぶ知識と技術はすべて過去に得られた業績であるから、学問の進歩には発見と発明が必要であり、若い世代が受け継ぎ発展しなければならない領域である。ただ研究はやみくもに始めてよいものではなく、その前に研究の何たるかを理解しておかなければならない。若手研究者にとって最も望ましいことは優れた研究者のもとで研究する機会が得られることで、指導者の学識、研究能力、指導力を学べるだけでなく、そのような研究室には優秀な研究者が集まり、お互いに切磋琢磨できるからである。ただ、誰もがこのようなチャンスに恵まれるとは限らないので、研究指導書のたぐいを読み研究の進め方について参考にするとうい。

研究者の条件として、エールリッヒの4つのG (Gedult 忍耐、Geschick 技能、Glück 幸運、Geld 資金)をはじめ、Geist (開拓者精神)、Gesundheit (健康)、その他が挙げられているが、私はGedanke (思考) が特に重要と考えている。ニュートンは偉大な業績がなぜ得られたかを問われて、「絶えず考え続けたからだ」と答えている。



研究論文が目的、方法、結果、考察、結論から成ることは誰でも知っているが、研究を始めるに当たって最も重要なのはテーマの選択である。テーマは「人のやらないことを選び、オンリーワンを目指せ」と言われるが、統計によると発表された論文の20 - 30%は1回も引用されていないといわれ、それでは労力と研究費の無駄遣いに終わる。相対性理論やDNA二重らせんモデルのように、既存のパラダイムを根本的に変えるような業績であればそれに越したことはないが、そこまでなくても科学の進歩に寄与できるテーマを考えなければならない。メンデルはテーマを決めるのに2年かけたとのことである。研究テーマのヒントは他の研究者の論文(ランドシュタイナーのABO血液型の発見、ファーブルの昆虫の研究)やserendipity (フレミングのペニシリンの発見)によって得られることもある。これらは研究者の観察眼とひらめきによってテーマが見出され、巧みな研究方法の開発によって得られた成果である。

国際評価によると日本は政治、経済、金融は低位にあるが、科学・技術は常にトップクラスの座を占めている。Science誌が発表するその年の科学の10大トピックスに、日本人の研究(iPS細胞、ラミダス猿人、小惑星探査機はやぶさ、光合成に関与するたんぱく質複合体の構造解析など)が含まれていることが多く、日本の科学のレベルの高さを示している。しかし懸念されることは、2009年までの10年間の論文数をみると欧米の先進国では30 - 40%、中国では492%の伸びであるのに対し、日本は14%と最下位であり、特に臨床医学の論文数は減少していることである。研究人口の減少が原因の一つだが、日本の科学技術研究費は総額で世界で2位、GDP比で1位であることを考えると、科学技術研究費が十分に活用されていないこと、国内国外の研究者との共同研究が少ない点にも問題があると考えられる。

これらの問題に関して徳島大学も例外ではない。ただ幸い徳島大学の研究施設と設備は近年著しく向上し、研究費も増加している。研究は最高の知的興味であり、社会が求めている大きなテーマは幾らでもある。学部学生、大学院生、及び若手研究者の研究意欲と研究成果に対する期待は極めて大きい。

学遊抄 学生時代の思い出

微生物・遺伝子解析学分野 小野 恒子

長い徳島大学での生活をあと数ヶ月で終えようとしている。この度“医学部だより”のコラムに“学生時代の思い出”を寄稿するようとのメールが届いた。人様に披露できるほどのエピソードは持ち合わせていないが、おそらく本学に入学して以来の長い年月の締めくくりとして我が身を振り返って見よとのことと、ここ数日おぼろげな記憶を呼び起こしている。昭和41年4月徳島大学医学部栄養学科に3期生として入学した。栄養学科は設立されたばかりでまだ卒業生が出ていない時期である。当時の受験生に対する説明では、“単なる栄養士の育成を目的としたものではなく、生命科学の一分野として新たな栄養学を確立するための教育研究者を目指す人材を求めている”とのことだったと記憶している。高い志を持って受験したわけではないが、理数系を目指していた私は何か未知の世界を探究することに小さな夢を描きつつ入学した。しかし、入学後はいつしかそのような思いは消え果てて、全く専門科目の勉強に力を注ぐことなく4年間を過ごし、卒業後まもなく自らの無知を思い知らされ学生時代の不勉強を悔いることとなる。

私たち団塊世代の学生時代は、日米安保条約改定を目前にまたベトナム戦争が泥沼化していた頃で、学生運動が激しさを増

していた。1・2年次の教養課程では専門科目の基礎となる化学や生物学よりむしろ文学、日本史、政治学等人文社会科学系への関心が高まっていた。数人の友人とともにマルクス主義や実存主義、あるいは演劇論などの読書会を開き、理想社会について議論していた。今はその殆どが記憶の彼方にあるが、スタン・スラフスキーの演劇論を熱っぽく語っていた友人が2年の時に中退して劇団養成所に行ってしまったことを思い出した。その後どのような人生を送っているのだろうか。また、この頃はドストエフスキーに夢中になっていた。ふと退職後に再びあの長編に挑んでみようかと思ってみるが、読破できるだろうか。その後は日本の現代文学、特に高橋和巳(当時の学生運動家に圧倒的な支持を得ていた)の「憂鬱なる党派」に強い衝撃を受け、ほぼ全ての作品を読み尽くした。一方でその対極にある福永武彦、中村真一郎、加藤周一らの芸術至上主義的な作品の奥深い魅力に捉えられ、今に至るまで心惹かれる文学者達である。このように、およそ理系の大学生とは思えない日々を送っていたため、休暇で帰省していた5歳年上の兄が私の小説ばかりの本棚を見て、「専門書が全くない。」と嘆いていた。

1969年、4年生となり否が応でも卒業研究に取り組みなけれ

ばならない。ところが、70年安保闘争が極めて激しくなった時であり、大学紛争は徳島大学も例外ではなく、医学部基礎棟が封鎖され、学生はクラス会を開き授業ボイコットするかどうか、ボイコットとなると卒業研究も含まれるのではといった状況で、結局その年の夏まで、無為に過ごすこととなる。卒業研究は川田十三夫教授の栄養衛生学教室で細菌学に取り組むこととなる。最初に与えられたテーマは助教授（本業？は外科医で週に2～3日大学に来ていた）の専門である「芽胞」に関することであり、ドイツ語の論文を渡され一語一語辞書を引きながら訳し始めた。しかし、まもなくその先生は退職し、ペンシルベニア大学から帰国したばかりの久恒助教授に代わり、私の研究テーマも「腸炎ビブリオの外膜成分の解析」に変更され、ドイツ語からは解放された。これが現在に至る細菌学との出会いである。

大量の腸炎ビブリオを培養し、フレンチプレスで菌を破碎し、高価なムラミダーゼでペプチドグリカンを分解し、得られた外膜のアミノ糖等を定量する。初めは来る日も来る日も検量線の作成で、窓ガラスに透かして、数回行った結果が完全に一致するまでの繰り返し。その後はごくわずか得られた外膜の定量であったが、これは夢（遠心後の上清をデカンテーションで捨てる時に目的のペレットまで一緒に流れ去ってしまう）にまで出てきた。成果が得られたのかどうか今でもよく分からないが、これが縁で医学部の細菌学教室で研究に携わることとなった。

このような落ちこぼれの学生ではあったが、親友との様々な議論や専門外の学問・芸術にどっぷり浸ることのできた学生時代は私にとってかけがえのないものである。

● 学生委員会から学生および保護者の皆さまへ ●

医学部学生委員会委員長
有澤孝吉

学生委員会は、学生生活を支援するための組織であり、学生さんの経済的支援に関する事項、指導・相談に関する事項、表彰・懲戒に関する事項、課外活動に関する事項などを担当しています。

本年4月に前任の石村教授から委員長を引きつぎ、約5か月が経過しました。その間、いくつか気がつきました点について、この場をお借りして意見を述べさせていただきます。

まず、学生証の紛失についてです。4月から学生証の再発行の依頼が10件以上ありました。学生証は、学内では常時携帯する必要があり、自動車の運転における運転免許証と同じくらい大切なものですので、くれぐれも紛失しないように注意して下さい。

二番目は、出席、レポートや試験における不正行為についてです。このような問題行為が発覚した場合、学生委員会では対応について協議をすることになります。特に試験における不正が明らかになった場合、その科目のみならず、その学期のすべての科目が不合格となり、必然的に留年となってしまいます。本人のみならず、親御さんにとってもつらい決定

を下さなければならなくなりますので、「自分の行いが人として正しいかどうかを考える習慣」をつけるよう、今一度お願い致します。

三番目に阿波踊りについてです。阿波踊りは、本学における特色ある課外活動の代表的なものでありますので、学生さんには、このような機会に大いに参加をし、楽しんでいただきたいと思っております。しかし、参加に当たりましては、連として調和のとれた踊りができるよう、ある程度練習を積むこと（騒音に注意して）、および祭りの期間中は本学学生として恥ずかしい行為をしないことに留意していただきたいと思っております。

最後に、精神的な問題による休学についてです。石村先生も以前書かれていましたが、精神的な問題は、長期の休学や退学につながる可能性があります。面談をさせていただいた折に、学生さんの将来に対する目的意識や社会をたくましく生きる力が不足しているのではないかという印象を受けました。保護者の皆様には、こうした精神面での指導やサポートを充分にさせていただきますよう、よろしくごお願い申し上げます。

● 教務委員会から ●

医学部教務委員会委員長 西村明儒

医学科では、問題学生に対して教務委員による面談を行っている。もちろん、面談は、問題学生だけでなく、学生からの希望で行うこともある。学業に関することは、教務委員が担当するが、相談内容が学業のみならず、学生生活全般に関する場合、学生委員の陪席を求めることもある。問題学生に対する面談では、仮進級、留年、出席不良、成績不良が多いが、成績不良で留年してしまってからでは遅いので、近頃は、カリキュラムの途中で成績を通知し発破をかけている。本人にサポっている自覚がある場合は、とても推奨できるものではないが、警告することで、比較的容易に改善する可能性はあるが、問題は、指摘されている内容について自覚がない場合である。これは、成績だけでなく、モラルや遵法精神などと大げさな言い方を掲げるまでもなく、社会人としての立ち居振る舞いに含まれる内容についても然りである。特に今年度は、徳島大学病院のIDカードの紛失が多い。自分の家

の鍵やキャッシュカードは、そう簡単には失さないであろうに、1割近くの学生が紛失している。自分たちの所属する組織、活動する場のセキュリティーについて無頓着過ぎる印象である。同様に講義室内のゴミか私物が判別のつかないモノ達の放置、学生控室の鍵の扱い、自習室の管理、など、セキュリティーのみならず、自分のいる環境への配慮もいい加減なようである。医療系の講義や実習は、単に知識を得たり、症例を経験したりするだけのものではない。医療人としての立ち居振る舞いを身に付けることが知識や技術よりも重要である。IDカードの管理やガラスバッジの交換は、その基本中の基本である。あまりいい加減さが続くようだとせっかく獲得してきた学生の権利を失いかねない。今年度からこれらの立ち居振る舞いに関しても、進級や卒業要件として評価することにした。教員1人1人の受ける印象は主観に留まるが、何十人も教員が同じ印象を持てば、これはもはや客観である。

数字で見る医学部

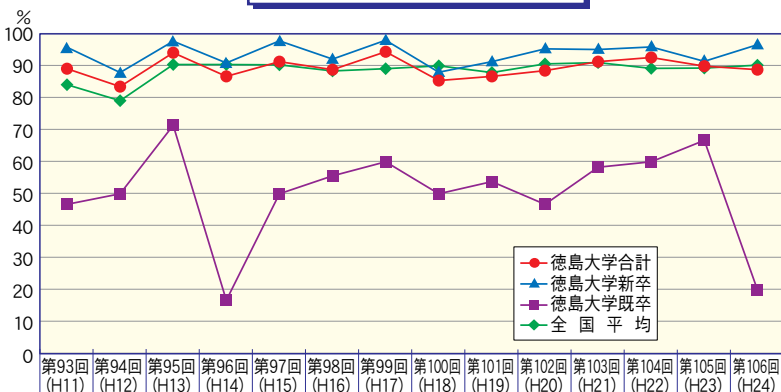
◆ 入学試験（医学・栄養・保健）

平成24年度 徳島大学医学部入学試験受験者・合格者数調・入学者数調

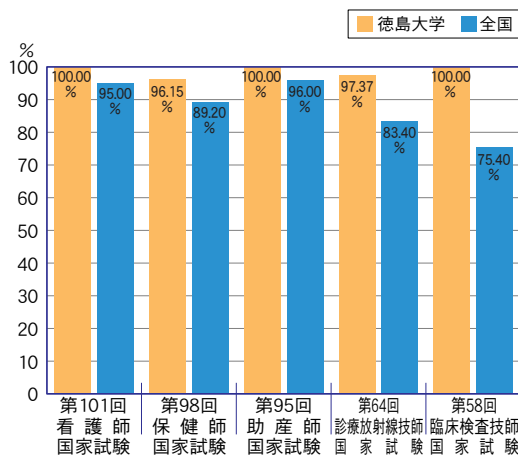
	定員	志願者	受験者	合格者数	入学者数	男	女	県内	県外	海外	現役	一浪	その他
医学科	114	488	400	114	114	74	40	41	73	0	49	37	28
栄養学科	50	228	145	57	54	7	47	19	35	0	45	8	1
保健学科	看護	70	382	246	77	70	6	30	40	0	62	8	0
	放射	37	199	143	38	37	22	5	32	0	26	8	3
	検査	17	117	106	19	17	6	9	8	0	13	4	0

◆ 国家試験

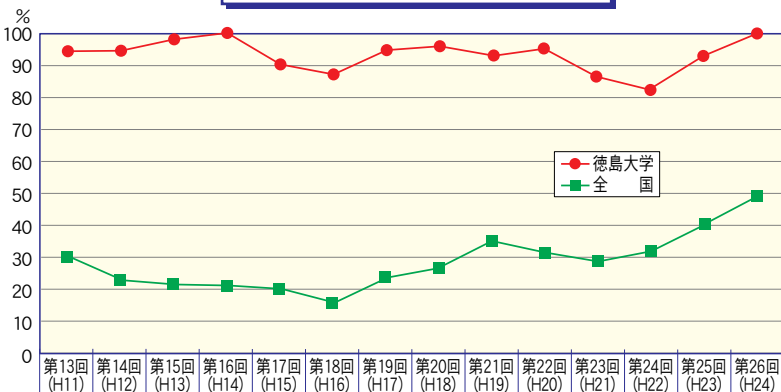
医師国家試験合格率の推移



保健学科 各種国家試験合格状況について



管理栄養士国家試験合格率の推移



◆ 科研費採択状況（医学部・附属病院の合計）

(平成24年7月1日現在)

研究種目名	平成20年度		平成21年度		平成22年度		平成23年度		平成24年度	
	件数	金額(千円)	件数	金額(千円)	件数	金額(千円)	件数	金額(千円)	件数	金額(千円)
特定領域研究	6	41,200	4	28,900	2	8,600	1	4,800	0	0
基盤研究 A	1	13,900	1	11,500	1	11,500	0	0	0	0
基盤研究 B	14	72,700	15	75,500	19	92,600	19	78,900	18	80,700
基盤研究 C	65	92,983	69	89,800	78	82,400	87	108,800	90	109,200
挑戦的萌芽研究	4	6,100	5	6,300	11	18,200	23	32,800	25	31,400
若手研究 (S)	1	25,200	1	14,400	1	14,400	1	14,400	1	12,800
若手研究 (A)	3	13,800	4	19,900	4	19,100	3	19,500	3	11,500
若手研究 (B)	39	59,600	52	77,600	47	69,400	51	66,600	50	77,100
研究活動スタート支援	7	10,510	5	5,980	1	950	2	2,600	2	2,400
新学術領域研究			1	25,000	2	28,200	6	42,400	6	43,900
特別研究促進費			0	0	0	0	0	0	0	0
特別研究員奨励費	1	600	5	3,400	5	3,500	4	2,800	3	2,700
合計	141	336,593	162	358,280	171	348,850	197	373,600	198	371,700

徳島医学会報告

■ 第245回徳島医学会学術集会(平成24年度夏期)

微生物病原学分野 内山恒夫

第245回徳島医学会学術集会は、平成24年7月29日(日)に徳島県医師会館において開催された。徳島大学の担当は微生物病原学分野(足立昭夫教授)と脳神経外科学分野(永廣信治教授)であった。初めに、谷岡哲也教授(看護管理学分野)、友竹正人教授(メンタルヘルス支援学分野)、井本逸勢教授(人類遺伝学分野)による教授就任記念講演が行われ、それぞれのご研究の位置付けと重要性が示された。続いて2つのポスター会場に分かれ、それぞれ3セッション、計46演題の発表と活発な討論が行われた。この中から、第29回徳島医学会賞には、大学側から越智ありさ先生(生体栄養学分野)、医師会側から島健二先生(徳島県医師会糖尿病対策班)が選出された。また、第8回若手奨励賞には、坂本晋一、羽星辰哉、松本和久の各先生(徳島大学病院卒後臨床研修センター)が選出された。午後は第28回徳島医学会賞、第7回若手奨励賞の授与式が行われ、続いて坂東美佳先生(循環器内科)、西内健先生(川島病院)による第28回徳島医学会賞受賞記念講演が行われた。公開シンポジウムは、「徳島県の救急医療と地域医療：現状と展望」と題し、神山有史先生(亀井病院)、里見淳一郎先生(HBS研究部脳神経外科学分野)、余喜多史郎先生(徳島県立三好病院)、影治照喜先生(徳島大学病院地域脳神経外科診療部)、本田壮一先生(美波町国民健康保険由岐病院)による報告と総合討論が

あった。ドクターヘリの導入、ITを利用したネットワーク構築等の新たな展開と地道な活動の報告が行われた。続いて、「抗エイズ/HIV研究の今」と題した公開特別講演が行われ、杉浦瓦先生(国立病院機構名古屋医療センター臨床研究センター)、俣野哲朗先生(国立感染症研究所エイズ研究センター)により、エイズ研究の進展と現状が分りやすく解説された。本学術集会には、大学関係者95名、医師会関係者68名が参加し、また、公開シンポジウム・公開特別講演へは一般市民の参加も得て盛会であった。ご参加・ご協力いただいた多くの皆様に深謝申し上げます。



◆◆ 各賞受賞者 ◆◆

第245回徳島医学会学術集会において、下記の受賞者が選考されました。

第29回徳島医学会賞

大学：**越智ありさ** (HBS研究部生体栄養学分野)
抗ユビキチン化ペプチド Cblin (Cbl-b inhibitor) を用いた筋萎縮阻害剤の開発

医師会：**島 健二** (徳島県医師会糖尿病対策班)
徳島県医師会糖尿病対策班(第1次、第2次)活動の成果

第8回若手奨励賞

坂本 晋一 (徳島大学病院卒後臨床研修センター)
EGFR-TKI で induction therapy を行った左肺癌の1手術例

羽星 辰哉 (徳島大学病院卒後臨床研修センター)
くも膜下出血に続発した neurogenic stress cardiomyopathy

松本 和久 (徳島大学病院卒後臨床研修センター)
プロテインC活性低下を背景とし、オートマチック車への変更を契機に肺血栓塞栓症を発症したタクシー運転手の一例

若葉会奨学賞

医療法人若葉会の寄贈の趣旨に沿い、徳島大学医学部並びに徳島大学大学院医科学教育部及び栄養生命科学教育部に在学する私費外国人留学生(専攻生及び研究生を含む)の、奨学に資することを目的に授与されるものです。本年度は、次の3名が授与されました。

医科学教育部 医学専攻
博士課程4年次 Ganbat Gereltsetseg

医科学教育部 医学専攻
博士課程2年次 Batsaikhan Bat-Erdene

医科学教育部 医学専攻
博士課程2年次 Majigsuren Mungunkhhyag



平成24年度 6年生 OSCE 成績優秀者

平成24年6月30日、臨床実習クリニカルクラークシップの総仕上げとして、6年生を対象としたAdvanced OSCEを実施しました。成績が特に優秀であった学生には、玉置医学部長より表彰状が授与されました。このような臨床技能試験を通して、臨床能力の向上が期待されます。

最優秀賞 合田 慶介

優秀賞 岩崎 綾、坂本 浩輝、上田 沙希、赤澤 早起、
良元 俊昭、三村 千尋、穴井 健太、山本 直寛、
西原恵里奈

部門賞(評点評価部門) 井出 千晶、三木 康子、小田島 進、奥野 未佳

部門賞(概略評価部門) 鎌田 紘平、小林 杏奈



第64回西日本医科学生総合体育大会

柔道 女子個人戦

サッカー部 **優勝**



準優勝

加嶋 洋子
(医学科5年)



第3位

有澤 麻美
(医学科4年)

白衣授与・Student Doctor認定証授与

医療教育学分野 赤池 雅史

平成24年4月19日、長井記念ホールにて、医学科5年生102名と6年生83名を対象に、白衣授与・Student Doctor認定証授与式を行いました。本学医学科では所定の学内成績を修めることに加え、医学系CBTおよびOSCEに合格することを臨床実習履修の必須条件とし、臨床実習では、患者さんの同意を得た上で、指導医のもとで診療チームの一員として役割を有しながら、知識・技能・態度を学習します。この度のStudent Doctor制度の導入は、プロフェッショナルイズム教育として医学生としての自覚を促すとともに、社会および患者さんに対して、学生が一定レベルの知識と技量を有しているこ

とを示すことを目的としています。授与式では、玉置医学部長と安井病院長から激励のお言葉があり、5年生の島田俊樹さんによる宣誓に続いて、5年生の河村征仁さんと6年生の大隅敬太さんが代表として白衣とStudent Doctor認定証を授与されました。この制度が実質を伴ったものとなるように指導体制の一層の充実をはかるとともに、学生自身の努力にも期待したいと思います。



新任教職員あいさつ



総合研究支援センター・バイオイメージング研究部門 特任教授 堀川 一樹

平成24年6月1日付けで徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部・総合研究支援センター・バイオイメージング研究部門の特任教授に就任いたしました堀川一樹と申します。私は京都大学にて行いました細胞間接着分子カドヘリンの機能制御に関する研究で学位取得の後、東京大学では細胞間相互型のシグナル伝達因子 Delta-Notch シグナル活性の生体内計測と操作、さらに北海道大学、国立遺伝学研究所においてはカルシウムイオンやcAMP、cGMPをはじめとする細胞内セカンドメッセンジャーの高機能性蛍光・発光プローブ開発／生体応用に関する研究を行って参りました。徳島大学

では、既に国内随一の規模を誇るイメージング拠点として整備いただいております「徳島大学バイオイメージングステーション」(小動物用 PET / CT / MRI 等の *in vivo* イメージング機器ならびに組織・細胞・分子を計測対象とする最先端顕微鏡群から構成)の運用を通じ、皆様の研究活動の後方支援をさせていただきます。また、疾患の診断・治療法の確立といったトランスレーショナル研究の実現を目指し、動物個体から分子動態を複数のモダリティで可視化するための新規手法の開発を行うことで、本学の誇る最先端機器のもつ潜在能力を最大限活用できる体制を構築したいと考えております。今後ともご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

新任准教授紹介				異動年月日	異動内容	氏名	所属	異動年月日	異動内容	氏名	所属
				H 24. 5. 1	昇任	早淵 康信	小児医学	H 24. 8. 1	昇任	池田 康将	薬理学

医学部行事予定 (平成24年10月～平成25年3月)



10月1日(月)	後期授業開始		
10月17日(水)	解剖体慰霊祭	25年	
11月2日(金)	徳島大学開学記念日	1月上旬	第27回管理栄養士国家試験願書受付
11月3日(土)～4日(日)	大学祭		(1月中旬まで)
11月14日(水)	第107回医師国家試験願書受付 (11月30日(金)まで)		試験日：3月下旬
	試験日：2月9日(土)～11日(月)	1月19日(土)	大学入試センター試験 (20日(日)まで)
11月22日(木)	第96回助産師国家試験願書受付 (12月14日(金)まで)	2月25日(月)～2月26日(火)	入学試験 (前期日程)
	試験日：2月14日(水)		入学試験 (後期日程)
	第99回保健師国家試験願書受付 (12月14日(金)まで)	3月12日(火)	医師国家試験合格発表
	試験日：2月15日(金)	3月19日(火)	卒業式・大学院修了式
	第102回看護師国家試験願書受付 (12月14日(金)まで)	3月22日(金)	卒業式・大学院修了式
	試験日：2月17日(日)	3月25日(月)～3月31日(日)	学年末休業
12月17日(月)	第65回診療放射線技師国家試験願書受付 (1月7日(月)まで)	3月25日(月)	助産師、保健師及び看護師各国家試験合格発表
	試験日：2月21日(木)	3月29日(金)	診療放射線技師及び臨床検査技師国家試験の合格発表
	第59回臨床検査技師国家試験願書受付 (1月7日(月)まで)		*管理栄養士国家試験の合格発表は、5月上旬
	試験日：2月20日(水)		
12月25日(火)	冬季休業 (1月6日(日)まで)		



徳島大学は、学校教育法第69条の3第2項の規定による「大学機関別認証評価」を受け、「大学評価基準」を満たしていると認定されました。
(平成19年3月28日)

● 認証評価機関
独立行政法人大学評価・学位授与機構
● 認証期間 7年間
(平成19年4月1日～平成26年3月31日)

編集後記



“もう秋か。——それにしても、何故、永遠の太陽を惜しむのか、俺達はきよらかな光の発見に心ざす身ではないのか、——季節の上に死滅する人々からは遠く離れて”(A. ランポー 「別れ」 小林秀雄訳)。また、この詩を思い出す季節になった。土壌がその後の人生をはぐくみ、人生はそれを拓く意志にある。若いときには不確実性の中で、その選択の機会が何度か与えられるだろう。“さて、俺には、魂の裡(うち)にも肉体の裡にも、真実を所有する事が許されよう。”(同上) 秋、文学に“一杯の水”を求めてみては？
(森口博基)

発行 徳島大学医学部 編集 医学部広報委員会
広報委員 森口博基(委員長)、泉 啓介、安友康二、三田村佳典、酒井 徹、大塚秀樹、米原壽男

本誌へのご意見・ご要望は、(総務係) E-mail: isysoumu1k@tokushima-u.ac.jp までお願いします。
なお、写真は執筆者各位の提供により掲載しています。
Tel: 088-633-9118 Fax: 088-633-9028 URL: http://www.tokushima-u.ac.jp/med/